

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00249

研究課題名（和文）リビング・ヘリテージのための無形文化アーカイブ：バリ島の天女物語をめぐる身体伝承

研究課題名（英文）Archive of Intangible Culture for Living Heritage: Bodily Transmission of Balinese Nymph Tale

研究代表者

野澤 暁子（野澤暁子）（NOZAWA, AKIKO）

名古屋大学・人文学研究科・共同研究員

研究者番号：20340599

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世ヒンドゥー・ジャワ時代にインドネシアのジャワ島東部とバリ島で広まった天女伝説「スリ・タンジュン」を中心に、今世紀初頭からユネスコの新たな理念に加わった「リビング・ヘリテージ」の視座のもと、芸能文化の創造的伝承に資するアーカイブ構築の実践的研究を行うことを目的とする。本研究はバリ島におけるこの物語の伝承を焦点とし、「1938年にジャワ人文学者Priyonoが出版したバリ島発見の貝葉写本のスリ・タンジュン研究書」と「今日のバリ島における韻律詩としての口承技法」との比較を通じ、西欧近代が広めた書籍文化におけるリテラシー的解釈と伝統的なオラリティ文化それぞれの特徴と差異を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Priyonoの研究書の分析を通じて明らかにしたのは、本著が当時のオランダにおける文献学的枠組みからスリ・タンジュン物語の起源と散文形式の文章化に尽力したことで、「読む物語」としての解釈のあり方を生んだことである。この知見をもとにバリ島で儀礼歌伝承者を対象に調査を行った結果、オリジナル写本を構成するWukir/Adriという韻律形式の身体知に内在する「規範と自由」が明らかとなった。そこで人間の思考を制約するメディアの問題をふまえながら、現地の口承技法を音楽人類学的に可視化するとともに、現地と協働で制作した伝承者の朗読と演劇を組み合わせた映像作品のオンライン公開を通じて文化伝承の促進を図った。

研究成果の概要（英文）：From the perspective of UNESCO's new concept "Living Heritage" since the beginning of this century, this research project works on the Sri Tanjung story that spread in eastern Java and Bali during the medieval Hindu-Javanese period of Indonesia to construct the archive for the creative transmission of traditional performing arts. Focusing on the transmission of this story in Bali, the study clarified the features and differences between Priyono's 1938 book on Balinese palm leaf manuscript of the story, which signifies the typical literacy interpretation in a form of book spread by Western-oriented modernity, and the oral transmission among locals as the bodily knowledge of poetry recitation.

研究分野：芸術人類学

キーワード：文化遺産 メディア 身体 ヒンドゥー・ジャワ インドネシア 芸能

1. 研究開始当初の背景

本研究課題「リビング・ヘリテージのための無形文化アーカイブ：バリ島の天女物語をめぐる身体伝承」(基盤C:19K00249)は、2016年度から2017年度にかけてインドネシア国立スラバヤ大学との連携で実施した国際共同研究加速基金(15KK0048)の過程で着想したものである。この国際共同研究ではジャワ島東部を拠点に、14世紀頃にヒンドゥー王国マジャパヒトが建設した遺跡に残る壁画に関する学際研究を、現地の考古学者と音楽学者と共同で実施した。この研究で着目したのは、その壁画に含まれる天女伝説「スリ・タンジュン(Sri Tanjung)」の図像である。この天女伝説は羽衣伝説と類似点を持ち、人間の男が天女と結婚し、様々な奇跡を起こす物語である。特に興味深いのは、無実の罪で殺された天女の妻スリ・タンジュンが、死の世界を彷徨った後、神の慈悲によって再生するというくだりである。この一連の描写が中世ヒンドゥー・ジャワ時代の死生観を反映しているという点から、現地の共同研究者との議論を通じ、マジャパヒト時代建造の遺跡の意義とも深い関連性をもつという見解に至った。

ここで新たな視点として加わったのが、この天女説話をめぐるジャワ島とバリ島の相違点である。ジャワ東部に位置する現在のモジョケルト市に都をおいたとされるマジャパヒト王国(1293-1478年)は、ジャワ島だけでなく、バリ島、マレー半島南部、スマトラ島、カリマンタン島沿岸部、さらに東方の島々まで治めたと伝えられる。特にジャワ島東隣のバリ島は、15世紀のジャワ島におけるイスラーム王国の台頭に押されたマジャパヒトの末裔が移住したという歴史的背景から、イスラーム化したジャワ社会で失われたマジャパヒト時代のヒンドゥー文化が伝承されるとされる。オランダ植民地時代からバリ島に残るマジャパヒト文化の研究が数多く行われてきたものの、天女物語スリ・タンジュンについての伝承については看過されてきた。そこで本研究は、バリ島における芸能としてのスリ・タンジュン物語の伝承の調査を行い、その生きた伝承の諸相を「リビング・ヘリテージ」という観点からアーカイブ化するという構想のもと企画された。

2. 研究の目的

本研究は、中世ヒンドゥー・ジャワ時代の天女伝説を中心に、今世紀初頭からユネスコの新たな理念に加わった「リビング・ヘリテージ」の視座のもと、芸能文化の創造的伝承に資するアーカイブ構築の実践的研究を行うことを目的とする。この人文学的実践は、近代以降のテキスト主義と、文化伝承の現場における身体知の間に双方向的な還流を生む新たなパラダイムの構築を目指すものである。

以上の目標のもと、本研究は二つの視点から構成される。一点目は、バリ文化における天女伝説「スリ・タンジュン」の心性である。バリ島においてこの物語は、読書というリテラシー文化ではなく、演劇や詩歌などのオラルティ文化のなかで伝承されてきた。これら芸能は儀礼の一環として上演されてきたため、その文脈の分析を通じて地域社会の精神文化におけるこの物語の意義を明らかにする。二点目は、リビング・ヘリテージの伝承における映像アーカイブの可能性である。スリ・タンジュン物語については、これまで1938年出版のPriyonoによるバリ島発見の貝葉写本の研究書と、1986年出版のAnis Aminoedinのチームによるパニユワンギ(東ジャワ)発見の貝葉写本の研究書の二つが知られている。そこで本研究は前世紀の文献学的蓄積をふまえながら、今世紀のメディア技術がスリ・タンジュン物語の身体伝承に与える可能性を現地との協働を通じて明らかにする。

この目的の背景には、申請者が専門とする芸術人類学を含め、近年の人文学の領域における「テキストと身体」の問題に対する意識の高まりがある。音楽研究ではその問い直しを提唱する米国のFrancesca S. R. Lawsonの研究が脚光を浴びているが、その理論的土壌には先駆者Walter Ongの研究(1982)とともに我国の徳丸吉彦と山口修による研究(*The Oral and Literate in Music*, 1986)も含まれている。従ってこうした先人たちの開拓した視座をふまえながら、本研究は2000年にRichard Engelhardtが提唱した「リビング・ヘリテージ=人間と文化遺産の持続可能な関係性」の価値に焦点をおき、現代の情報化社会における天女伝説スリ・タンジュンをめぐる有形文化・無形文化を架橋するメディアの可能性を追求する。

3. 研究の方法

本研究は、文献調査・現地調査・映像アーカイブ制作の三項目を次の4カ年計画で実施する見込みで始まった。1年目は文献調査を中心とした、PriyonoおよびA. Aminoedinらの翻訳テキストを精査する作業である。2年目は文献調査と並行して実施する、バリ島におけるスリ・タンジュン物語の伝承形態に関する調査である。3年目は、上記の文献調査と現地調査の結果にもとづく比較考察と、その成果の映像アーカイブ化作業である。そして4年目は、映像アーカイブの完成と国内外の学会での成果発表である。

しかし1年目にあたる2019年度に文献調査と予備的現地調査を実施した段階で、2020年初めの新型コロナウイルス流行によって本研究は停滞を余儀なくされた。この時点において、予備的調査では次の三点が明らかとなっていた。一点目は、今日のバリ島においてスリ・タンジュン物語はあまり知られていないという事実である。二点目は、1970年代にギャニャール県の或る村

がこの物語をアルジャという歌舞劇で上演したことがあるが、当時の上演者はすでに他界しているという状況である。そして三点目は、今日もバリ島ごく一部でスリ・タンジュン物語は伝承されるが、Priyono が転写したバリ島発見の貝葉写本のキドゥン様式(中期ジャワ語の Wukir/Adri 節)とは大きく異なり、現代バリ語で編まれたググリタンという自由韻律詩の儀礼歌に変容しているという実態である。

以上の発見をふまえながら、渡航規制が施行されていた 2020 年度から 2022 年度までの期間は文献の精査とオンライン上での現地との意見交換を並行的に進め、一年延長した 2023 年度に集中的な現地調査と研究成果の映像作品の制作を行った。これは当初の計画とは異なるものであったが、むしろ想定外の発見と方向性を導く結果となった。文献調査に関しては、Priyono の 1938 年著作「*Sri Tanjung: Een Oud Javaansch Verhaal*」の精査を通じて、「1930 年代の文献学的芸能研究が達成できた/できなかった要素」を明確化することができた。それはひとえに人文科学研究が依拠するメディアという技術的な問題に起因することも明らかとなった。したがってこの分析作業を通じ、2023 年度に現代のメディア技術と現地の身体知を融合した成果作品を現地と協働で完成するに至った。以下がその学術的・実践的研究成果である。

4. 研究成果

(1) 1938 年 Priyono の著作の特質：「書籍」という形態に着眼したメディア論的分析

文献調査の過程で一つの指針として導入したのは、Walter Ong や Marshall McLuhan などのトロント学派を中心に北米で発展したメディア研究である。これら一連の研究が議論するのは、メディア技術が「記述文化(リテラシー)」と「口承文化(オラリティ)」という二つの人間の文化記憶の伝承のあり方に及ぼす影響である。この視点からバリ島で発見された貝葉写本(ロンタル)を扱った Priyono のスリ・タンジュン研究書を精査した結果、次の点が明らかとなった。一点目は、Priyono 自身がロンタルの一次資料を発掘し、ありのままに転写したのではなく、当時彼が留学していたオランダのライデン大学図書館に収蔵されていた 14 点の断片化されたロンタルを「編集」したものであった背景である。二点目は、「一冊の書籍」という形態にスリ・タンジュン物語をオランダ語で紹介するにあたり、Priyono はロンタルの断片から選択した各節をローマ字転写しただけでなく、一つの起承転結で一貫した「散文形式の物語」に編み直したことである。そして三点目は、当時のライデン大学文献学者のコミュニティにおいて、Priyono はバリ由来のスリ・タンジュン写本を収集した言語学者 Van der Tuuk の後を引き継ぐ役割を担っていたという背景である。

以上の事実から浮かび上がるのは、本来儀礼の場で詩歌として多様な個性を通じて吟じられていたスリ・タンジュン写本が、近代西欧の生んだ活版印刷技術によって普及した「印刷本」というメディアへの文脈変換を通じ、「読む物語」という新たな伝承様式を派生した一側面である。この潮流はその後の児童向けの「スリ・タンジュン絵本」なども生み出し、20 世紀インドネシアのリテラシー教育と連動した文芸伝承の形式を定着させた。その一方で、19 世紀後半より植民地学者が蓄積した言説を踏襲して Priyono が記した「スリ・タンジュン物語の起源 = 東ジャワ」という見解は、今日に至るまで現地にも影響を及ぼしている。これらの文献調査から得た知見については論文「The Sri Tanjung Text by Priyono and the Interpretive Communities」(人類学研究所研究論集 Vol. 12, p. 82-95, 2023 年)の中で詳細に論じているが、Priyono の著作の特質とは端的に「近代にライデンの解釈共同体から生まれた印刷本という新たな形式のロンタル」であったという見解がその中心をなす。

(2) スリ・タンジュン説話のオラリティ：貝葉写本の韻律形式から

近代のリテラシー中心主義が生んだ Priyono の研究書の調査は、同時にこの時代の文献学者が看過したインドネシアのロンタル(貝葉写本)の重要な側面の発見ももたらした。主な例は、スリ・タンジュン写本を構成する韻律詩の特徴とそこから展開しうる可能性である。Priyono も著作で指摘しているが、バリ島由来の合計 14 点のスリ・タンジュン写本は、全て Wukir という韻律形式で整えられている。この形式は一節が合計 9 行から成り、各行は以下の要素で構成される。

第 1 行 = 9 音節・末尾母音 u、第 2 行 = 6 音節・末尾母音 e、第 3 行 = 8 音節・末尾母音 i、第 4 行 = 7 音節・末尾母音 u、第 5 行 = 8 音節・末尾母音 u、第 6 行 = 8 音節・末尾母音 e、第 7 行 = 8 音節・末尾母音 u、第 8 行 = 8 音節・末尾母音 a、第 9 行 = 8 音節・末尾母音 a

なお、この韻律形式は G. E. Marrison が報告するバリ島に伝承させる韻律形式(pupuh)のうちの Adri と呼ばれる様式と同じ構造をもつ。日本の平安時代における漢詩のように中世のバリ島では貴族社会でジャワ語文芸が普及していたため、このバリ版写本はバリ文字で記されながらも使用言語は中期ジャワ語である。なお、パニユワングで発見された写本は、研究者の間で「ロンタル」と呼ばれてはいるが、貝葉写本ではなく紙冊子に比較的新しいジャワ語がアラビア文字で記されたものである。また、パニユワング版写本の韻律形式は Wikir を含む複数の節で構成される点でも異なる。

Priyono はスリ・タンジュン物語の起源を東ジャワと推論しているが、この二つの写本については、パニユワング版が 16 世紀のジャワ社会のイスラーム化以降に記されたものであり、バリ

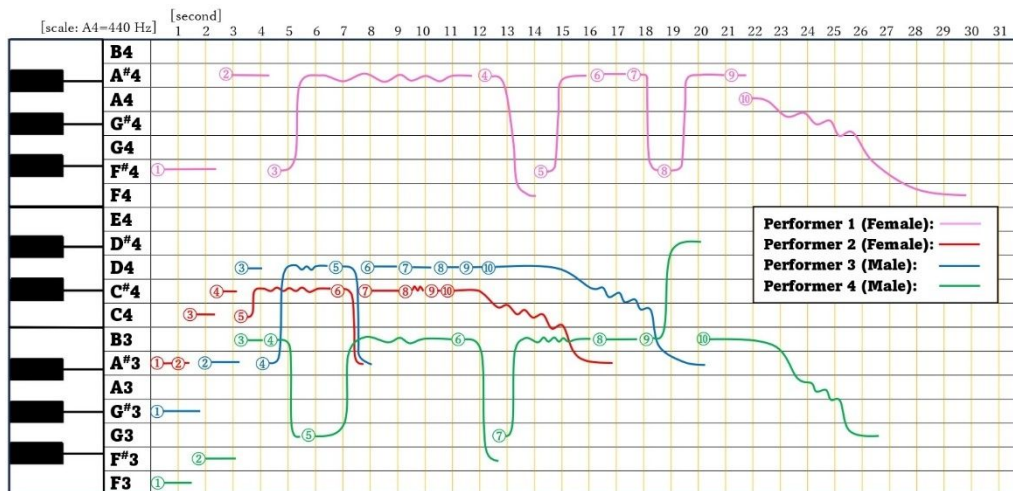
の貝葉写本がより古い形式であると捉えるのが妥当であると考えられる。さらに単一の韻律形式というバリ版の特徴は、一部の教養人が個の領域で味わう文芸作品ではなく、儀礼の場で集団が朗誦を通じて身体的に共有したという社会的文脈を示唆する。この特質から、バリ版のスリ・タンジュン写本の韻律形式は W. Ong が指摘する「集合的記憶の装置としての口承技法」の一例であると想定できる。したがって、当時の文献学的思考と学術書籍という形式が Priyono の関心をスリ・タンジュン物語の逐語的な意味や物語の起源に集中させたという見地に立つことで、この著が後景化したバリ写本の韻律詩そのものを現代のメディア技術で発掘することの意義を見出すに至った。

(3) バリ島の身体知としてのキドゥン韻律形式の可視化

コロナ禍での文献調査から得た上記の知見をふまえ、渡航規制が解除された 2023 年にバリ島の研究協力機関である私立学園 Sekolah Bali Q_tta(協力者：I Made Agus Tisnu 氏)と国立芸術 d 大学デンパサール校/Institut Seni Indonesia Denpasar(協力者：I Kadek Widnyana 氏, Ms. Ni Komang Sekar Marhaeni 氏)との共同調査を開始した。その内容は、バリ伝統のキドゥン(儀礼歌)が歴史的に蓄積した多様な韻律詩に着目し、Wukir/Adri 節の身体知をもつ伝承者の朗誦の映像記録化と分析を行うものである。Agus Tisnu 氏のチームの事前調査によって、合計 10 名の伝承者を集めることができた。そして 2023 年 7-8 月に各伝承者の自宅で撮影を実施した。

こうして収集した映像をもとに今日のバリ島で伝承される WUKIR/ADRI 節を分析した結果、次の表に示した通りとなった。なお、この表は空間的制約から 4 名のサンプル(男女それぞれ 2 名)のうち、詩を構成する全 9 行の中の第一行だけを取り上げを取り上げたものである。

[表 1 . WUKIR/ADRI 節の旋律構造 (野澤暁子作成)]



上表から二点の特徴を観察することができる。1 点目は、この韻律形式の旋律の「型」(パターン)である。歌い手は全て「10 音節・末尾母音 u」の規則を共有する第 1 行を歌っているが、それぞれ別の章から取ったもので、歌詞も異なる(伝承者 1=P1: 「Ki/ Si/da/pak/sa/ mang/ke/wi/nu/wus (これよりシダバクサについて話しましょう)」、P2: 「Su/měng/kěng/ gě/gěr/ ka/ton/ang/la/ngu (彼らは山に登った)」、P3: 「Prap/ti/ ring/ ka/ yang/an/ tan/ a/san/tun (神々の宮殿に到着したとき)」、P4: 「Kang/ pa/nang/ki/lan/ sě/sěk/ se/pu/nuh (国王の会議室は混んでいた)」)。これらは歌詞の違いにもかかわらず、3 つの共通点「それぞれ異なるペンタトニックスケール(5 音未満)で構成される 最初の音節は短い持続時間の低い音で始まり、10 番目の音節はメリスマとともに高音で長く伸ばしながら、徐々に下降して最後は最初の音節とほぼ同じ音高に落ち着く 中心部は 1 つないし 2 つの台形状の起伏で構成され、最低音と最高音の範囲は 2 3 音である (P1: 約 349/367 ~ 466Hz, P2: 233 ~ 277Hz, P4: 185/196 ~ 247Hz)」が明らかとなった。そして 2 点目は音域の多様性である。伝承者の学習プロセスや出身、社会的・教育的背景はさまざまである。性別や年齢の違いに加えて、人の声にはそれぞれ独自の特徴がある。こうした身体的特質にもとづき、それぞれの音域は P1 = F4 ~ A#4、P2 = A#3 ~ C#4、P3 = G#3 ~ D4、P4 = F3 ~ D#4 といった幅がみられる。さらに、P1 と P2 は比較的保守的なスタイルを維持しているのに対し、P4 は時おり規範的な音域から逸脱する個性がみられる。つまり、以上の可視化された Wukir/Adri 節から分かるのは、基本的な型を共有しながらも、伝承者の身体的・社会的属性が築いた個性に即した多様な表現が展開されているという、韻律詩の伝統をささえてきた「規範と自由」である。

さらにこの映像記録資料を現地の文化伝承に還元するために現地のチームが主導で実施したのは、伝承者の朗誦の動画、子どもたちのスリ・タンジュン物語の演劇、そしてオリジナル写本の歌詞の翻訳(インドネシア語/英語)を合体させた映像作品の制作である。例えば写真 1 は、主人公シダバクサが天界のインドラ神を訪問した場面である。ヒンドゥー教ではエネルギーを司

るインドラ神は稲妻を象徴するため、その状況を体現する演出が施されている。こうした工夫は、W. Ong が「第二次オラリティ」と表現する、前世紀のテレビなどの視聴覚メディアの普及以降全世界に浸透した、聴覚・視覚一体型の情報受信文化に即したものである。今日この文化はインターネットという新たな通信技術によって、いわば「第三次オラリティ」なる状況を生み出している。そこで「成果の社会還元」について現地と議論した結果、この作品を限られた層のためのアーカイブとしてではなく、より幅広い層へキドゥンの魅力を伝えることのできる YouTube 上での公開が望ましいという結論に至った。従って成果作品はアカウント名 Living Heritage Project から、インドネシア語版(<https://www.youtube.com/watch?v=4BUv3cmI55Y&t=1s>)と英語版(<https://www.youtube.com/watch?v=kNfAF1vf2ZU&t=2s>)の二つが公開されている。

さらにこの公開後、本来の口承のみによるキドゥン伝承に対し、こうした動画という伝承媒体の効果を知るために、私立学園 Sekolah Bali Q_t a の小学 6 年生にアンケートを行った。アンケートは 11 項目からなるが、ここでは重要な二点である「キドゥン伝承の実態」と「動画を見た後の伝承意欲」を紹介する(表 2)。

[表 2]

[写真 1]



質問 10 の「あなたは日常でキドゥン実践に関わっていますか?」(表 2 上)という問いに対し、「全く関わっていない(緑)」が全体の 65.9%を占め、「時々関わる(橙)」が 31.7%、残り僅かが「ごく稀に関わる(紫)」という結果だった。バリ島では日常的に儀礼が行われ、それらに儀礼歌キドゥンは欠かせない要素であるが、近年現地で憂慮されている若者層のキドゥン伝承意欲の衰退がこの結果にも反映されている。それに対し、質問 11「この動画から、キドゥン伝承を試みたいと思いませんか?」(表 2 下)への回答は、「とてもやる気が出た(青)」が 9.8%、「まあまあやる気がでた(赤)」が 51.2%、「あまりやる気がでない(橙)」が 31.7%、「全くやる気が出ない」が 7.3%の結果となった。

この結果から、バリ島の若年層のキドゥン伝承の現状と成果作品の関係は次のように推論することができる。アンケート対象者のうちキドゥン伝承に「少しでも関わる者：全く関わらない者」の割合は「34.1%：65.9%」と後者の割合が圧倒的に多かった。一方、キドゥン鑑賞後に「少しでも伝承に意欲が出た者：意欲を感じない者」の割合は、「61%：39%」となった。つまり、「現行の伝承者<非伝承者」から「(伝承への)関心>無関心」と、キドゥン伝承の力学が反転したのである。当然ながらこの結果から成果を過大評価することは控えるべきであり、文化の現場において直接的に効果を発揮するとは考えていない。さらにこの作品はまだ多くの改善点が残されている。だがそれらの要素をふまえながらも、この結果は若者層の文化伝承におけるメディアの効果を示していることは明らかであり、「リテラシーとオラリティ」の問題をめぐる今後の展開にも有効な本研究の発見の一つであると考えている。

[総括と展望]

本研究は延長期間を含む 5 年間を通じて、中世ヒンドゥー・ジャワ時代にジャワ東部とバリ島で広まった天女伝説「スリ・タンジュン」を扱いながら、西洋近代のリテラシー中心主義の産物である Priyono の研究書「*Sri Tañjung: Een Oud Javaansch Verhaal*」の解釈と、現地の伝統的なオラリティ文化の中で伝承される韻律詩の身体技法という、二つの記憶伝承の特徴を明らかにした。今後はこの知見を発展させ、今日のデジタル時代における伝達媒体の多様な進化をふまえながら文化記憶の伝承をめぐるメディアと身体の問題をさらに追求していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Akiko Nozawa	4. 巻 Vol. 7 No. 1
2. 論文標題 Recalling Hindu-Javanese Voices in Bali: Anthropological Media Praxis between the Visible and the Invisible	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Indonesian Journal of Social Studies	6. 最初と最後の頁 (印刷中)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nozawa	4. 巻 vol.12
2. 論文標題 The Sri Tanjung Text by Priyono and the Interpretive Communities	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人類学研究所研究論集	6. 最初と最後の頁 82-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野澤暁子	4. 巻 No.41
2. 論文標題 本とフィールドの間で 考える文化、歴史、物語の伝承	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 JOINT No.41	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野澤暁子	4. 巻 第11号
2. 論文標題 The Sri Tanjung text by Priyono and the Interpretive Communities	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人類学研究所 研究論集	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nozawa	4. 巻 Vol. 4
2. 論文標題 The Rediscovery of the Sudamala Story: The Narrative Relief of the Candi Tegowangi between Literacy and Orality	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究科『人文学研究論集』	6. 最初と最後の頁 393-410
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nozawa	4. 巻 Vol. 5
2. 論文標題 Reassembling Musical Heritage: The Agency of Wayan Pande Tusan and Gamelan Selonding Culture in Bali	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 5th Symposium of the International Council for Traditional Music Study Group on Performing Arts of Southeast Asia	6. 最初と最後の頁 pp. 216-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 Akiko Nozawa
2. 発表標題 Recalling Hindu-Javanese Voices in Bali: Anthropological Media Praxis between the Visible and the Invisible
3. 学会等名 THE 1st INTERNATIONAL JOINT CONFERENCE ON SOCIAL STUDIES AND HUMANITIES: Collaboration Faculty of Social Sciences and Law Unesa - Nagoya University - Airlangga University (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 野澤暁子
2. 発表標題 バリ島の儀礼歌の伝承状況: 儀礼実践とオンライン動画との比較から
3. 学会等名 南山大学人類学研究所2023年度第1回共同研究会「デジタル化が生み出す新たな生/知のあり方 記録・身体・モノ」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Akiko Nozawa
2. 発表標題 How to Recite the Sri Tanjung Manuscript of Bali: Interweaving Colonial Texts and Physical Knowledge
3. 学会等名 the 7th symposium of The International Council for Traditions of Music and Dance (ICTMD) Performing Arts of Southeast Asia Study Group (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Akiko Nozawa
2. 発表標題 The Banjaran Sari Opera: The Imagined Hindu-Javanese Performing Arts of Indonesia
3. 学会等名 The 47th ICTM World Conference, University of Ghana, Legon, Ghana (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Nozawa Akiko
2. 発表標題 Pengenalan Proyek Film Candi Tegowangi & Relief Sudamala
3. 学会等名 Seminar International: Beserta Pemutaran Film Sudamala dan Cerita Rakyat Bubuksah dan Gagangaking (国立スラバヤ大学主催国際セミナー) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野澤暁子
2. 発表標題 ジャワ遺跡の物語：文献学的解釈と文化実践
3. 学会等名 南山大学人類学研究所2020年度第3回共同研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akiko Nozawa
2. 発表標題 Candi Act: The Audiovisual Project of Javanese Hindu Art for Transmission of Living Heritage
3. 学会等名 The 45th ICTM World Conference, Chulalongkorn University: Bangkok (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 THE 1st INTERNATIONAL JOINT CONFERENCE ON SOCIAL STUDIES AND HUMANITIES: Collaboration Faculty of Collaboration Faculty of Social Sciences and Law Unesa - Nagoya University - Airlangga University	開催年 2024年～2024年
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
インドネシア	国立スラバヤ大学	国立芸術大学デンパサール校	